

# なぜ、多数派科学者の意見が 記事に反映されないのか

小島正美・食生活ジャーナリストの会代表

2019年10月30日

JFJシンポジウム

# 話のポイント

- なぜ、多数の科学者の声が届きにくいのか。
- ・メディアは科学者よりも市民の声、不安、懸念を重視する
- ・メディアは科学者、市民とも「少数」意見を大事にする。
- ・メディアは「弱者」の立場に立つ
- ・メディアは「共感」を好む
- ・メディアは「分かりやすい物語」を好む
- ・メディアは基本的に「権威」「権力」を批判する

# ゲノム編集食品記事も同じ構図



◎構図とは＝ゲノム編集食品の記事（朝日19年7月9日）。科学者は「従来の育種と同じで安全」と言っている。主婦連、消費者団体連絡会など市民は「新しい技術に不安」「被害が起きたら責任をとるのか」「食べたたくない」の両論併記。どちらかといえば、市民の不安を強調。市民の声を入れずに記事を書くことは不可能。なぜか？

# 記事の構図は安全よりも不安を重視

◎期待される消費者像はいつも「不安です」

いろいろな消費者がいるのに・・・

◎政府や科学者は「安全」と説明、しかし、消費者は「不安」「信頼できない」と言っている。いつも、この構図。

- ・政府や科学者に全く説明能力がないということか
- ・双方を同時に並べると「不安」が余計に際立つ＝サーマル・グリル錯覚と似ている（冷たいものと熱いものを同時に触ると熱いものが余計に熱く感じられる）。

◎この構図が不思議だと思われなことが不思議。

# 両論の併記の弊害の一面



◎科学者の同意の勢力図は  
50対50か、1対99か

◎メディアは、科学者の世界の  
意見の分布を示さない

◎少数意見を尊重することに意  
義を見出すからだ。少数意見を  
無視しないことも大事。

◎少数派に有利？

# この両論併記の凡庸さ。 みなさんはどう思いますか

科学者の意見と市民の不安の声を聞いて並べるだけ。  
この構図なら高校生でも書ける。これが本当に記事といえるのか。  
記者は並べて終わりか。メディアを支えているのは「市民」  
ニュースも選挙と同じで、市民を忖度するしかないのか？

# 両論併記は不変か

◎私の記者40年の経験から、両論併記の構図は50年間変わらず。

◎市民の不安、懸念を載せるのが記者の仕事。不安に応えるのは政府や科学者の仕事。一方、科学者たちの多数の声を載せない傾向がある。

◎なぜ、科学者の多数（科学界の合意）を報じないのか

■科学者の説明、解説を書きながら、それに納得しない市民の不安を載せることは、科学者の見解よりも、市民の不安、気持ちを重視している証拠。つまり、安心（感情） > 安全（科学）。メディアは安全よりも安心を重視して記事を書く。

# HPVワクチン報道でも 科学よりも市民の声

## ポイント

- ・ 記者は市民もしくは市民団体重視
  - ・ 記者は少数派の専門家に着目
- ・ 問題点を指摘するのが記者の仕事と認識



# HPVワクチン報道の経過（私の体感）

■2013年4月から国の定期接種始まる。無料で接種。

・しかし、2013年3月25日、被害者の親が東京で記者会見。足のけいれんなどを映したCDを配布。メディアは被害者の声を次々に載せた。このときはまだメリットとデメリットを公平に報道できた。

■2014年＝徐々に危険なイメージが醸成

・6月に西岡久寿樹氏（難病治療開発機構理事長）がHANS「子宮頸がんワクチン関連神経免疫異常症候群」を記者に公表。9月にはハンスを中心に「重い副作用1112人」（毎日新聞）と大きな記事。脳や全身に諸症状が発生するイメージが徐々に強くなっていった。

・ワクチンのメリットを記者に説明していた「子宮頸がん征圧の専門家会議」が製薬会社から金銭を支給されていたなどメリットを説く学者には不利な報道が増えた。

# 子宮頸がんワクチンでけいれん



# 危ないニュースはいつも大きな扱い

夕 4版 2014年(平成26年)9月12日(金) 毎

## 子宮頸がん ワクチン 重い副作用 1112人

### 研究チーム 厚労省調査の6倍

副作用が相次いで接種勧奨が中止されている子宮頸がんワクチンについて、今年3月末までに重い副作用が確認された患者は1112人にととの分析結果を、難病治療研究振興財団(坂口力理事長)の研究チームがまとめた。厚生労働省が集計した176人の6倍以上に上る。チームは「厚労省は症例を狭くとらえ過ぎだ」と指摘、調査方法の見直しを求めている。13日から長野市で始まる日本線維筋痛症学会で報告する。

子宮頸がんワクチンは2009年12月から今年3月末までに約338万人が接種し、約2500人の副作用報告が寄せられた。厚労省の有識者検討会は、発熱や夫申す不安上の心配ま

人を詳しい分析が必要な重い副作用と判断した。その上で、原因はワクチンそのものではなく、注射の痛みや不安が引き起こす「心身の反応」によると結論付けた。

一方、同財団のチームは約2500人の症例について、救急搬送の必要性や後遺症の恐れなどを分析した結果、半数近い1112人を重い副作用と判定した。多かったのは中枢神経障害(けいれん、歩行障害、記憶力の低下など)▽視力や聴力の感覚器障害▽広範囲の痛み―などで、症状が重なり変化したりするケースも多かった。

チームには神経内科、小児科、精神科などの臨床医約10人が参加。チームの目

るまでの平均期間が約5カ月だった。「接種カ月以上してからの発因果関係が薄い」と厚労省検討会の見解と異なる結果になった。

チームリーダーの西寿樹・東京医科大学医学研究所長は「連れの心身反応よりも、ワクチンに含まれる免疫補助剤に反応して脳神経が炎症を起している」と解釈する。医学会などに働き掛ける療指針の策定を急ぐ。

厚労省結核感染症担当者は「176人は査をするが、それ以外の再調査予定はな作用の情報収集は報目を増やすなど強化

- ・多数派科学者のデータと苦しむ一部を後押しする「共感的」に市民の姿、どちらが社会者、科学者よりも不安を重視する。
- ・私が記者になっているわれたこと「市民に共感される話を探せ」「常に弱者の立場に立て」
- ・公立福生病院の人工透析治療の中止問題も明らか医師・病院を敵視した内容で展開

# 2015年以降はもはや後戻りできず

■2015年~16年5月 = もはや危険のイメージが完全に定着

・15年7月、信州大学の池田氏の「特定の遺伝子が免疫異常に関係」の記事が各紙で報道。当時は私も「もしかして日本人特有の遺伝子が関係しているかも」と疑ったほど。

・16年3月、池田氏が「患者の8割が同じ遺伝子」と日本人特有の症状ではと口頭で公表。

・同日、TBSに池田氏登場「脳に異常が起きている」

・16年5月、札幌の日本小児科学会。ハンス外来を開いた横田氏が患者を診て「こんな異常な症状は見たことがない」と発表。

◎TBSの映像と池田氏の影響は絶大だった。

# 危険イメージのピーク 池田氏のテレビ出演（2016年3月）

- ・ 国の研究班の代表が述べたインパクトは大きい
- ・ 信州大学副  
学長の証言
- ・ 誰もが信じる



# 流れを変えたのは一女性ジャーナリスト (2016年6月)

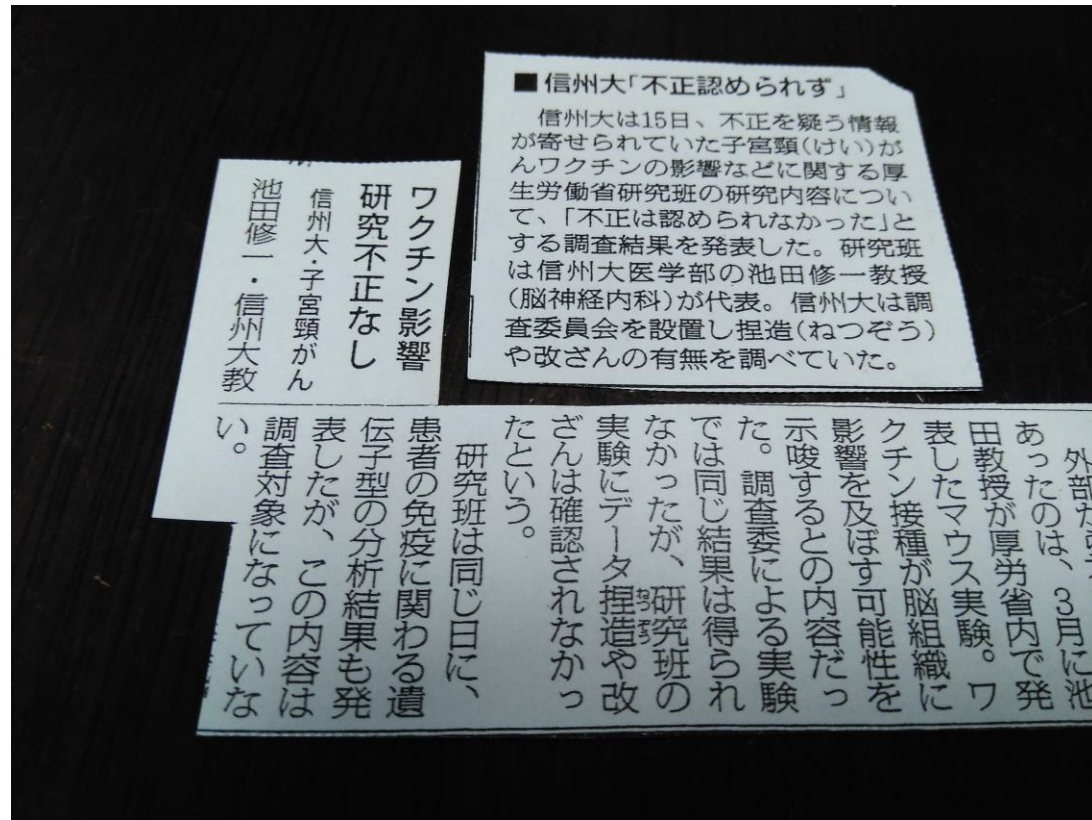


◎雑誌「ウエッジ」に村中璃子さん（医師でジャーナリスト）が「ねつ造」と報道。マウス1匹の試験、しかも直接接種したマウスではなかった。

- ・私は村中さんとは面識なし
- ・当時は「本当か」と思った
- ・信州大学の調査委員会を見守ることになった。



# 池田氏の実験は報道に値する実験ではなかった。このとき新聞は「死んだ」



◎毎日、朝日、東京が「不正なし」の見出し。いままでとは考えられないほど小さい記事。

◎調査報告を詳しく報じなかった。なぜ、「新聞は死んだ」

◎調査結果を取り寄せた = 「ワクチンを直接接種したマウスではなく、そのマウスから血清を採取し、無垢のマウスの脳に反応させたもの。マウスは1匹で予備的な実験・・・」。村中さんの記事の通りだった。

◎大勢の記者が一人のジャーナリストに負けた。



なぜ、実験の不備よりも  
「不正なし」を優先したか。

これまでの被害者側に立った報道の支柱は  
池田氏の研究にあった。池田氏の研究が間違っていたら、  
過去の報道が間違っていた、ことになる。  
過去の報道と齟齬が生じたため、半ば沈黙した。

# メディアは世間に弱いのでは！

- 新聞メディアは「市民、大衆の代理機関としての言論機関」と「権力を監視する真実の使徒」を期待される。
- 権力からの圧力を恐れて、委縮していると批判されるが、実は市民からの圧力を恐れて、世間を忖度して自主規制、委縮する姿のほうが実態では。
- メディは不利になると「沈黙」。これは被害者団体にも不利。被害者の声をしっかりと報じることも少なくなるからだ。

# 17年11月、村中さんがジョンマドックス賞受賞。東京新聞だけが大きく報じた



◎村中さんを報じると①新聞メディアの過去の報道に偏り、間違い、ゆがみがあったことが分かる②池田氏のこれまでの研究を否定することになる③市民団体から反感を買う。

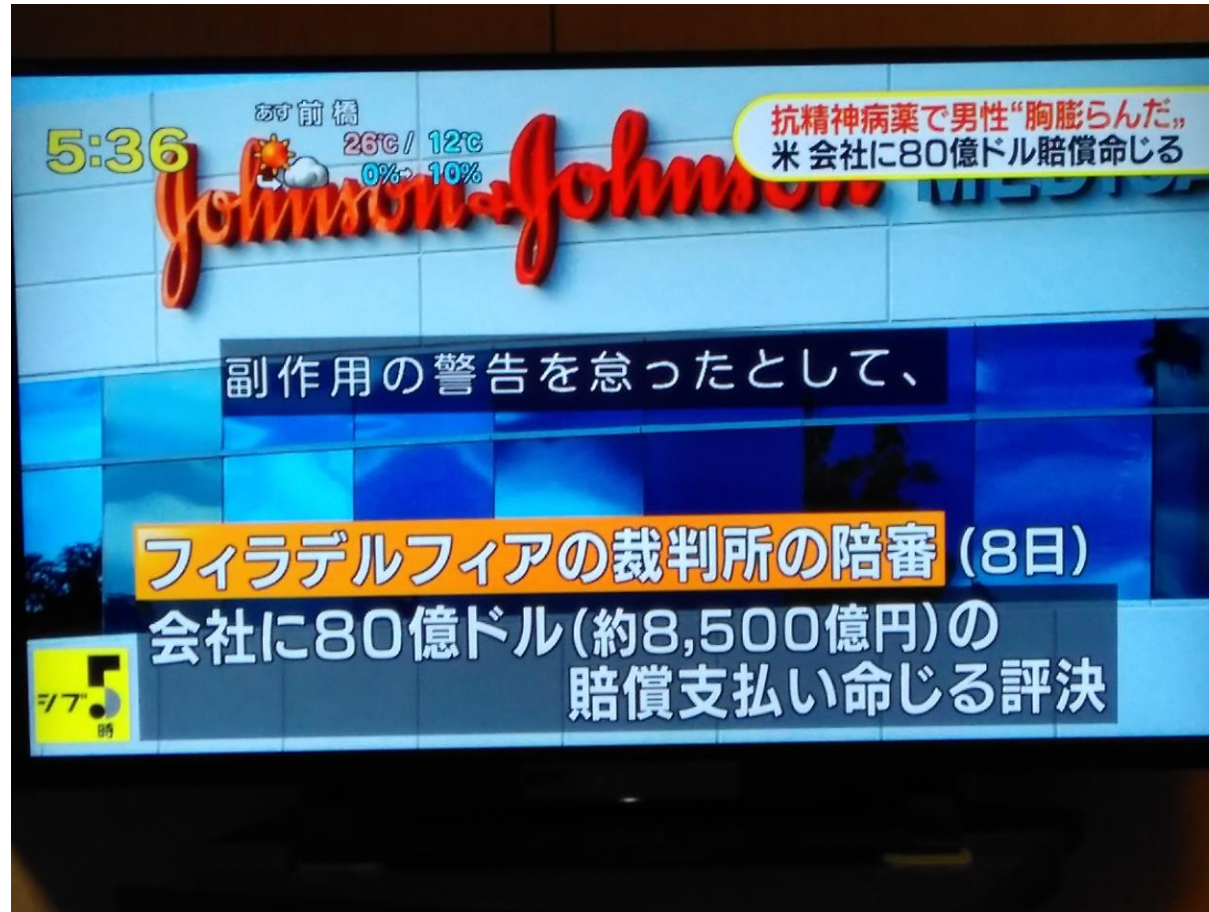
◎毎日新聞の外部筆者の坂村健氏、三浦瑠璃さんが「なぜ受賞を報じないか」と執筆。

◎勇気ある東京新聞の2人の記者。言論の健全性は生きている！

# HPVワクチンの科学的 な側面はほとんど知られ ないままに終わった

- ・「弱者に立つ」「市民の共感」という視点報道の結果、危ないというイメージが定着しただけに終わった。
  - ・最近、少し風向きは変わりつつあるが。

抗精神薬の副作用で8500億円賠償  
「警告」を怠っただけで。市民の勝利。



# グリホサートでがん訴訟 ベビーパウダーでがん訴訟

米国ではいずれも、けた外れの懲罰的損害賠償  
日本とは異なるものの、科学と市民の関係を  
考えるうえで重大な問いかけ。

# いまは科学が市民の気持ちに負けている時代か。

- ・ 裁判の陪審員の気持ちは世間の気持ち
- ・ なぜ、科学的な事実を突きつけても、市民の気持ちをつかむことができないのか？  
これが現代の科学がかかえる課題！

なぜ、多数科学者の意見は軽視されるのか。

メディアと市民は共犯関係

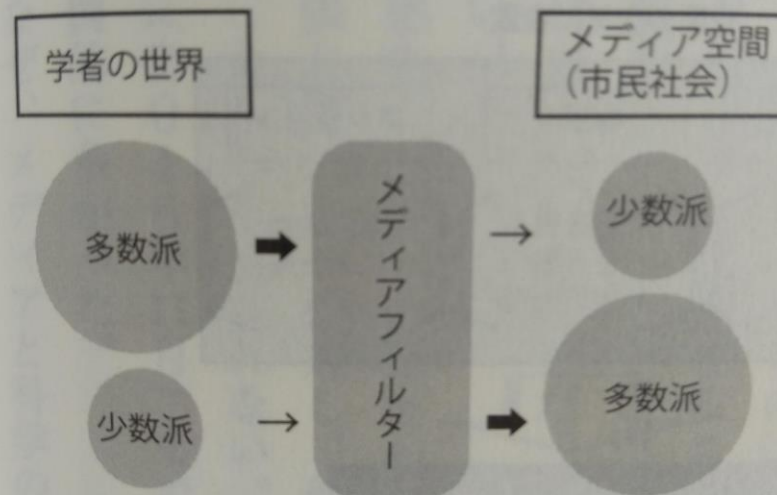
食品添加物、農薬、放射線リスク、ゲノム編集、GM作物などは多数の科学者の声が届かない。なぜか。メディアが市民の声を重視するからか？



# メディアによる少数増幅逆転・現象

- 学者集団の学会では当然、科学的な見解が多数を占める。国の各種審議会の構成も同じ。
- しかし、それが世間に降りてくと科学者の多数派が少数勢力に転落する。市民社会と政治世界では、メディアと市民の意見が重視される。
- ゲノム編集、遺伝子組み換え、食品添加物、放射線リスクなど。

図 1-2 メディアの少数増幅効果による逆転現象



[解説] 学者の世界では少数や異端派でもメディアのフィルターを通過すると、市民社会では多数派となり市民の選択に大きな影響力を発揮する。

報道された。メディアは、科学者の意見が重視され、その結果、少数派が多数派を占めるといえる。このように、

ゆがみのニュースの方程式。ニュースの構図をどう変えていくかが課題。

